

コメント

4つの視点からの中国都市史

大黒 俊二

報告者の一人汪利平氏は、中国出身で現在アメリカの学界で活躍する中国史研究者である。今回は「アメリカにおける中国都市文化研究の現状」について報告された。他方、銭杭氏は中国生まれ、中国在住の中国史研究者である。氏は現在執筆中の『上海社会生活史』の基本構想について語られた。これに対し、両報告へのコメントを求められた私は、日本における西洋(中世)史研究者である。したがってコメントには、偶然の出会いとはいえ中国、アメリカ、日本、西洋という4つの視点が交錯することになる。4つの光に照らされた中国都市史はどのような姿を示すのだろうか。

まず共通する関心から始めよう。汪氏、銭氏ともに報告や討論でウェーバーとハーバーマスに言及されたのが私には印象的であった。現在、中国の歴史研究者の間ではこの両者がよく読まれているという。また汪氏は、アメリカで中国都市史への関心が高まる発端にウェーバーの存在があり、ハーバーマスの議論が注目されたといっている。こうした傾向は都市史に関心を持つ日本の研究者にもなじみ深いものである。むしろ正確には、かつてはそうであった、というべきである。そこで、戦後の日本でウェーバーやハーバーマス、とくに前者がどう受け止められてきたかを振り返っておこう。

戦後日本の都市史研究は、近代化の牽引車としての都市に注目し、その原型を西洋中世都市にみていた。西洋中世都市は、封建制を打破して築いた自由と自治の砦であり、その内で市民、人権、資本主義など近代の諸価値を育んだ

近代化のモデルとみなされていたのである。それは封建遺制を抱える遅れた日本にとってめざすべき目標であった。と同時に、それが都市なるものの一般的、普遍的モデルともみなされていた点に注意しておく必要がある。戦後の一時期、いささか単純な発展史観の中で、日本やアジアの都市の「遅れ」や「停滞」、市民の「欠如」が語られる一方、日本にも堺などに西洋に似た自治と市民の萌芽が見られると主張されたが、これは西洋中世都市を普遍のモデルとみなした上での議論であった。羽仁五郎、増田四郎、大塚久雄などに代表されるこうした見方の背後には、共通してウェーバーの都市論があった。ウェーバーは都市史に関しては(も)近代化と普遍のモデルとして参照されたのである。のちに80年代になって注目されるようになったハーバーマスの「公共圏」も、自由な市民による公論形成の場を重視する点で、西洋近代をモデルとする上記の問題意識で受け止められていた。

しかし、近代化モデルとしての西洋(中世)都市という見方は日本では今では過去のものとなった。20世紀後半、自由や市民など西欧近代の諸価値が揺らぎ始めるとともに、日本が物質的な意味では近代化をとげてしまったため、近代化モデルを西欧に求める姿勢はおのずと薄らいでいったのである。それにかわって1970年代以降、都市史の主流は社会史へと移っていった。自由や自治、資本主義の発展に代わって、都市内諸集団の社会的結合、市民の自意識やアイデンティティ、儀礼、家族、性、暴力、

周縁者への注目など、「社会史」という大雑把な言葉でくくるしかない多種多様な研究が現れてきた。これらの社会史研究によって、従来の研究に格段に幅と深みが加わったのは事実だが、他方で研究の焦点がぼやけ、同じ地域・時代の都市を研究する者の間でも共通の関心ももちにくくなったのも事実である。

今日もこの傾向はそれほど変わっていない。こうした社会史の隆盛は西欧での動きに並行したものである。今日では、都市史研究において西欧と日本の研究者に大きな関心の違いがあるようには思えない。研究のレベルも向上し、実証面では現地の研究に比べて遜色のない研究も現れてきた。しかしその反面、失われたのは西洋都市を見る日本独自のまなざしである。かつて西洋都市を近代化のモデルとして仰いでいたとき、中世都市のどこに注目するかはおのずと定まっていた。コミュニオン運動、都市法の獲得、商工業の発展などである。これらこそ市民、自由、自治を欠いた日本が目指すべきものであったからである。しかし今日、西洋の一都市を取り上げてそのギルドや兄弟団を分析する日本の研究者に、そうした定まった視点があるようには思えない。実証のレベルは上がったが、外国（異文化）の立場のみが提出しうる独自のまなざしはかえって弱まったように思われる。こうして、善し悪しは別にして、社会史の隆盛と固有の視点の衰退は同時に進んだ。

以上は私なりの荒っぽい整理にすぎない。しかし今回2つの報告を聞いて改めて思い出したのは、上記のような日本の西洋（中世）都市史研究の歩みである。これと比べたとき、両報告の語る近年の中国都市史研究はどのように見えてくるだろうか。

第一に、近代化論から社会史へという変化が、アメリカの中国都市史研究にも見られる点が興味深い。汪氏によると、1980年代までアメリカの研究者は中国都市には近代化を推進する力が欠けているとみなしていた。最初の本格的都市史研究といえるロウの研究は、漢口を例に中国都市にも商工業の発展と公共圏の形成によって近代化の契機が欠けていたわけではなかったと主張したが、こうした問題設定自体、近代化論の枠内にあるといえよう。

しかし汪氏の語るその後の展開をみると、こうした近代化論的発想は急速に薄れていったようである。わずか10年ほどの間に対象とする時代、地域ばかりか視角もはるかに多様化していった。90年代以降の研究に、もはや近代化論のような明確な焦点を見て取ることはできない。多様化の様子をみるとジェンダー的視点、新歴史主義などアメリカらしさを感じるころもあるが、犯罪、同郷団、都市計画、伝統の創出など我々にもなじみ深い主題が多く、大まかな傾向は社会史に向けての歩みと総括できそうである。アメリカの中国都市史研究は、日本と同じように近代化論から社会史へ、ただし日本と違って急速に変貌した。この変化の速さは、汪氏も強調するように、現代中国の急速な近代化と都市化から影響を受けたものであろう。現代中国の急速な都市化が、遠く離れた異文化のアメリカ人にも強烈な印象をあたえ、都市史という新しい主題を発見させたに違いない。汪氏の紹介する近年の研究を見ると、中国史において初めて都市史という研究分野を発見し、都市文化の魅力に出会った研究者の初々しさのようなものが感じられるのである。

他方で銭氏の報告を見ると中国内部での研究状況はだいぶ異なる。銭氏は、かつて中国では農村史研究が中心で都市史の蓄積は少なく、わずかばかりの都市史も、農村の搾取の上に成り立つ都市の寄生的性格や、そこに住む支配層の専制や奢侈を強調するものであったという。ある研究者はそうした都市のあり方を「病的」とまで評している。専制的性格、支配と奢侈の中心という見方はウェーバーの中国都市論に類似しているし、「病的」という言葉は「アジア的停滞」という言葉を思い起こさせる。ところが現在銭氏が中心となって執筆中の『上海社会生活史』は、上海に住む人々の「社会日常生活」を食事、衣服、住まい、家具から風俗習慣、典礼儀式にいたるまで叙述しようとする意図しており、まさに社会史そのものである。とすれば中国内部では、農村史から都市史へ関心が移動するに際し近代化論を経なかったのだろうか。アジア的停滞の見本のごとき都市論から一足飛びに社会史へ移行したのだろうか。もとより銭氏の短い報告からこう速断することはできない

が、中国内部で近代化論が都市史研究にあたえた影響（の有無）について聞いてみたいところである。

近代化論の影響が気になるのはもう一つ理由がある。銭氏は『上海社会生活史』を構成するに当たり、「社会生活」の内容についてかなり立ち入った理論的考察を行っている。私にはこの理論的考察が異様に思われる。生活史や社会史とは理論で分析するものではなくまず叙述すべきものだ、という思いが私には（そしておそらく日本の多くの研究者にも）あるからである。概念用語を駆使して書かれた社会史は、はたして読むに耐えるものになりうるだろうか、という疑念がぬぐえない。

こうした感想も、じつは戦後日本の歴史学における近代化論から社会史への変貌とかかわりがある。日本では社会史は、一面では、理論で重武装した社会構成史への反発として現れたのである。社会構成史はそれ自体が一つの壮大な近代化論であり、「世界史の基本法則」の確立をめざして、各時代・各地域の経済構造がマルクスやウェーバーからのドイツ語直訳の難解な概念用語で分析されていた。都市史研究もこの理論的大枠のなかで一定の役割を割り振られていた。しかし社会構成史が理論の整合性と体系化を進めれば進めるほど、人が生きる生活の場という現実感覚が歴史学から薄れていったのは否めない。社会史は、こうした現実感覚から遊離した歴史学への批判として出現したのである。それゆえ社会史は歴史学の文体を一新した。歴史家は平易な常識の言葉で語り始め、分析よりも叙述を重視するようになった。これは日本独自の事情かもしれない。しかし近代化論の経験を経たのちに社会史に向かうとき、広く見られる傾向ではないかとも思われるのである。中国における都市社会史は理論と分析の方向に向かうのであろうか、もしそうとすれば背後にある理由はどのようなものなのか、気になるところである。

銭氏の報告に関してはもう一点ふれておきたいことがある。氏は中国の人々が上海人に対して抱いている否定的イメージ（「醜い」、「小気」、「悪い根性」）を紹介している。これを語る際の氏の口調がいかにも屈折しているところが私に

は興味深い。氏はこうした評価をある程度は肯定しつつも、これを冷静に見つめて、むしろ未来のために積極的に生かしていく必要があるという。これは上海に住み上海人の立場から都市社会史を書こうとする人だけがもちうる視線であり、上海を外から見つめる人、たとえばアメリカの研究者にはもちにくい視線である。私はこの視線を貴重なものと思う。社会生活史という主題を展開するには、表面に出す必要はないがどこかでこの感覚が必要である。単純なことだが都市には個性があり、個性には（すべてではないにせよ）そこに住む人だけが理解し表現しうる部分がある。これは、強烈な個性にとむ都市を多く抱えるイタリアを研究対象としている私がつねづね感じているところである。銭氏が、現在執筆中の『上海社会生活史』においてこの視線をどう生かしていくのか、興味あるところである。

以上、4つの視点が交錯してかえって雑駁な内容になってしまったが、汪利平、銭杭両氏の報告へのコメントである。中国都市史という未知の領域を垣間見させてくれた両氏に御礼申し上げる。